

実践報告 (Report)

# 自然観を視点とした〈言語/造形〉によるアート・メディエーション

——事例アフリカ (タンザニア) ——

Art Mediation by <Language/Art> from the View Point of Life: Example “Africa (Tanzania)”

磯部 錦司\*・イミック アレクサンダー\*\*・笹瀬 綾香\*\*\*

ISOBE, Kinji\*

ALEXANDER, Imig\*\*

SASASE, Ayaka\*\*\*

## 摘 要

本実践は、〈自然/生命〉を視点に、言語と造形によるメディエーションから「芸術の6層」を検証することを目的とした一連の研究における実践事例である。自然観を核となる「知」ととらえ、タンザニアと日本の小学校において「生命 (いのち) のイメージ」を主題に、ワークショップと鑑賞活動を展開した。アフリカの表現は、色彩及びモチーフとその描き方に特徴が見られ、その内容は、日本の子どもたちの鑑賞活動においても言語化された。それらの分析の詳細は別途報告する。

キーワード：生命，自然，アート，言語，メディエーション

Key words : life, nature, art, language, mediation

## 1. 背景となる理論

### 1.1 先行研究

本実践は、「芸術の6層」(磯部, 2020)の実相と教育における知の構造を、言語と造形から検証することを目的とした一連の研究<sup>1)</sup>における実践事例である。「芸術の6層」とは、J. デューイ (J. Dewey) の芸術論における芸術の働きと現代日本の生命論を基盤に、芸術を、A層「環境との一体化」、B層「個の想像的世界の形象化」、C層「環境の芸術化」、D層「生活の芸術化」、E層「社会的イメージの形象化」、F層「社会的創造活動の芸術化」の6層から示したものである<sup>2)</sup>。これまでの研究では、まず、現代日本の生命論とデューイの芸術論を基に「知としての自然観」を構築させる芸術の働きを6層から検討し<sup>3)</sup>、その実相を質的な分析から構造化し提示した<sup>4)</sup>。次に、美術教育学と心理学の協働による質的・量的な相互分析から、芸術において生成される意味を、「生命 (いのち) イメージ」を課題に、日本、オセアニア、アフリカ、アジア、ヨーロッパで収集した記録から検討し、6層の活動内容及び生活文化との関係において示した<sup>5)</sup>。しかし、形成される意味は多岐に渡り、検証のために各国・地域において言語化された表現の意味は必ずしも深層において共通の意味を持たず、言語

と造形の融合的な解釈による分析が必要であることが課題として残された。6層をとおして生成される個々の意味は、個人の生活背景や文化、経験に裏付けされたものであり、より統合的、相互的な分析が求められた。本研究では、これまでの日本各地及び諸外国の学校、施設の協力によって得た実践記録と、新たな日本とアフリカでの実践を基に、6層の活動のプロセスと作品、言語化されたインタビュー及びポートフォリオ、事後の記述を用い、諸言語と造形に生まれる齟齬を表面化させ、融合的、統合的な解釈（メディエーション）から芸術において生成される意味をより明らかにしていく。本稿は、そのための実践事例報告である。

## 1.2 本実践の意味

### (1) 自然観を知の核とした21世紀型能力の具体化

グローバル化と地域性の両立、文化との関連、人間の内面的な側面の位置づけが、以後の実践の課題として指摘される。その課題は、環境問題だけでなく現代社会の平和や人権など全ての問題に通底するものである。その背景において、J. デューイの「知を統合する芸術の働き」や、H. リードの「芸術をとおした教育」の考えからも、21世紀型能力の育成において美術教育の役割は大きいことが考えられる。一連の本研究では、知の中核として自然観を捉え、自然観を知として構築させる造形表現・美術科教育について実践研究をこれまで継続してきた（1997～2019）。

### (2) 現代日本における関係的・状況的な生命論

現代日本の生命主義を提言する生命哲学は、日本文化論を基軸に持ちながら「いのち観」を中心とした関係的、状況的な生命観を示し、社会との対峙と「生命への問い」によってポストモダン的な生命観を拓こうとしている。また、20世紀後半以後の現代美術の思潮に見られる現象学、社会彫刻の芸術観、及び環境芸術、ワークショップ、コラボレーションの展開に見られる「芸術文化におけるエコロジー」の思潮は、新たな自然概念の方向を示そうとするところにおいて共通する。それらの論考を基に、本研究は、生命をコアとする関係的、状況的な自然観を検討し、その自然観を構築させる芸術の実相を6段階から提案した。本実践は、B層の「生命（いのち）のイメージ」をもとにそれを検証することを目的とした実践である。

### (3) アート・メディエーションによる分析

メディエーションは、言語、医療、司法等の領域において活用され、双方に生まれる意味の解釈の齟齬を表面化し、融合的、統合的、相互的に意味づけていく手法である。「アート・メディエーション」とは、その考えを芸術の意味解釈に援用した本研究における造語である。本研究では、プロセスの記録、制作者へのインタビュー、制作者のポートフォリオ、作品についての事後の記述から形成された意味について分析する。これまで収集した記録については現地語及び既に翻訳された日本語において行い、本稿では、日本とアフリカでの新たな実践を対象に行う。言語間はいミックが、造形、プロセスの関係は磯部が分担し、対象者が形成する意味の解釈を行う。

## 2. 実践の概要

### 2.1 主題「生命（いのち）のイメージ」

本実践の目的は、子どもが芸術をとおして形成する自然や生命に対する意味を、プロセス及び造形化と言語化による融合的な質的手法において分析することである。「生命をコアとした芸術による教育実践」の教育的効果を示すことが課題となる。これまでに「生命のイメージ」を課題に、アジア（日本、タイ、韓国）、オセアニア（オーストラリア）、ヨーロッパ（ドイツ、フランス、デンマーク、チェコ）において、表される造形と制作者の記述から表現内容を分析し、形成された意味について特徴を明らかにし、文化・生活等の背景との関係についてその分析を行ってきた。本実践は、アフリカを対象に実施したものである。

### 2.2 アフリカにおける実践

#### (1) 実施校

- Lusanga Primary School（タンザニア、トゥリアニ）
  - ・ 小学2年生～7年生（174名）、2020年2月25日、26日
- Radiant Universal Study Centre Primary School（タンザニア、ザンジバル）
  - ・ 小学3年生～5年生（35名）、2020年2月27日

#### (2) 実践内容

- 「和紙づくり」及びワークショップ「生命の共在」
 

日本文化の紹介を兼ねて、和紙の原料を用い和紙をつくり、その和紙と身の周りの自然物を用いて生命の共有をテーマに共同制作で行う。
- 絵画「生命のイメージ」の制作と発表
 

和紙ハガキ大、クレヨン（日本製16色市販）を用い各自が絵画で制作し、自分の作品の内容を言語化する。

#### (3) 方法

実践は笹瀬、磯部のTTで行い、言語化はイミックがワークシートを用い行った。スワヒリ語は笹瀬、現地教員が担当し、英語はイミックが担当した。記録は、プロセスの映像と作品、ワークシートにおいて収集を行った。尚、笹瀬は2月のタンザニアでの実践と、その後の11月の日本での実践の両地において担任教員として携わった。

### 2.3 日本における実践

#### (1) 実施校

- 清須市立清洲小学校
  - ・ 小学2年生（175名）、2020年11月25日、27日

#### (2) 実践内容

- 絵画「生命のイメージ」の制作

アフリカと同内容、材料において実施。

#### ○アフリカの絵画の鑑賞活動

上記のアフリカの子どもたちが描いた「生命（いのち）のイメージ」の作品と同テーマにおいて自分たちが描いた作品を用い鑑賞し、言語化において共通点や相違点に着目し、生命への見方や感じ方を深める。

#### ○作品の展示

アフリカの作品と日本の子どもたちの作品を紐でつなげ、一つの大きな作品として校内に展示し、鑑賞した。

#### ○方法

実践は、笹瀬を含む担任教諭の協力を得て、磯部とのTTで行った。日本での実践は、アフリカとの交流活動として、総合的な学習活動における異文化間教育、いのちの教育の一環として行われ、図画工作科の授業が横断的に関わった。自分たちの作品とアフリカの作品を比較しながら鑑賞が行えるよう同テーマでの絵画制作を先に設定し、次に、鑑賞活動を行った。鑑賞活動では、アフリカの子どもたちの背景や生活を理解させるために、笹瀬がタンザニアで担任時に記録した生活、文化、環境に関わる映像を構成し活用した。記録は、プロセスと作品は映像で行い、作品についての説明を記述で収集した。

### 3. 〈言語/造形〉によるメディエーション

#### 3.1 ワークショップ「生命の共在」

アフリカの実践では、和紙の原料を用い、和紙づくりを行い、その和紙（90×180cm）を土台に、周辺にある植物を用い共同制作を行った（図1）。各自がその作品に関わることで、そこに事物をとおして共在することによって作品が完成することを意図した。ここで述べる「共在」とは、「子どもと子ども」、「子どもと自然物」、「子どもと日本文化」の関係である。子どもたちは、日本文化の象徴である和紙に興味を持ち、敷地内にある自然物をそこにオブジェとして置き、共同作品を完成させた。その作品は、乾燥した後、校内に展示された。

#### 3.2 〈言語/造形〉による「生命（いのち）のイメージ」の表現

アフリカでの実践は、日本語をスワヒリ語に通訳し、制作の主旨とテーマ、方法について説明を行った。まず、「生命（いのち）」（“Uhai”）からどんなことを想像するのか言語で発表した。次に、紙とクレヨンを配布し、その言葉のイメージを色と形で表現した（図2）。制作時間は約20分であった。完成後、自分の作品について、ワークシートに記述し、その内容を言葉で発表した（図3）。

そのモチーフは、太陽、花、木、実、動物などの自然物と自然の風景、人間、家などの生活環境にあるものが使われ、その内容は、太陽や草花や木の自然そのものが描



図1 ワークショップ「生命の共在」



図2 Lusanga Primary School



図3 イメージの言語化



作品1



作品2



作品3



作品4



作品5



作品6



作品7



作品8



作品9



作品10

図4 「生命（いのち）のイメージ」（タンザニア，2020）

かれたもの、自然物と人間を組み合わせるその関係を表したもの、人間の生や誕生を表したものに特徴が見られた。アフリカの内容の分析については、別に報告する。

日本での実践も同様の展開において実践した。日本の作品の特徴は、アフリカに比べ花や木や動物などは少ないが、モチーフとして扱われる対象は類似している。ただ、描かれる自然の内容や色はアフリカと日本では明らかに違いが見られた。それは、制作後の鑑賞活動において、子どもたち自身が見つけ、発表している。表現内容は、視覚的な自然そのものを表現している内容、あたたかさや優しさ大切さ等、思いや願いが表現されている内容、つながりや広がり、循環などの関係性を表現している内容、生命の誕生や出来事、生命力等が現象として表現されている内容に大別できる。これらアフリカと日本の表現内容の相違点の分析については、別に報告する。

### 3.3 〈言語／造形〉による鑑賞活動

#### (1) 鑑賞のプロセス

日本の実践では、「生命（いのち）のイメージ」の制作を経て、アフリカの子どもたちが同テーマで描いた作品1～作品10を用い、次のステップから鑑賞活動を行った。

導入となるAの段階では、自分の主観から感じたことを語り、感じ方を共有した。その発言をもとに、Bの段階では、感じたことの根拠を造形要素から見つけ、その根拠をもとに感じたことを語らせた。これらの段階では、自分なりの感じ方を大切に鑑賞させた。次のCの段階では、アフリカで現地の子どもたちの担任教諭であった笹瀬が、アフリカの日常において記録していた子どもたちの活動の様子や生活、環境の映像を本授業用に構成し子どもたちに見せた。ここで子どもたちは、アフリカの衣服、住まい、食事、文化など日本との違いが多くあることを知る。子どもたちは、その映像から作者の背景（生活、文化、環境）とつなげながら作品を鑑賞した。その段階（C）では、「自分の表現との相違点」に目を向けさせ、再度、自分たちの表現とつなげて鑑賞させた。

#### (2) 子どもたちによるメディエーション

子どもの発言に見られるA、B、Cの段階は、必ずしも順序だったものではなく、導入部分のA段階においても、根拠を示しながら自分たちの背景と比較した発言は見られる。Aの段階では、自分なりの直観的で感覚的な感じ方によって、感じたことが言語化され、感じ方が共有されていった。自分の主観をもとに感じたことを語る段階では、「楽しそうな感じ、あたたかい感じ」等の発言に見られるように、感覚的な感じ方や感情が語られる内容と、「光っている感じ、自然がいっぱい、お花がいっぱい、キリンがお日様を浴びている、ひまわりみたいなお花がある」等、視覚的な状況から解釈がされている内容に特徴が見られる。しかし、自分なりの主観的な感じ方は、Aの段階だけでなく全てのプロセスの基盤となっている。Bの段階では、実践者の「どんなところからそう思う」という問いに対して、「くるくるしていて楽しそう、虹色の木があつてにぎやか、花がゆれているみたいで色がいっぱいあつてきれい、草原が

広がっていてきれい」等の発言に見られるよう、根拠となる造形要素（色、形、モチーフ、線質、構図等）と結びつけながら解釈を深めている。

そして、アフリカの生活や文化、環境を映像から知ることによって発言は多様化し、自分の側の主観的な解釈から、作者の背景を結びつけた解釈へと広がっている。

Cの段階では、映像をとおして背景にある生活や文化について知ることを経て、再度、アフリカの子どもたちの作品に戻って鑑賞することになる。この過程では、「色が違う。自分のはカラフルじゃない」「みんな変わってる。みんな違う」「虫みたいなのがたくさん描いてある」「木が歩いているみたいに見えていろんな色がある」「黒い木に太陽がさして焼けている感じ。太陽の光が明るくなっている」「奥に小さい太陽があっていろんな花がある。にぎやか」等、子どもたちは、自分の表現との相違点を見つけその特徴を示している。さらに、A～Cの全ての過程の中で、アフリカの絵画の特徴を表す記述に着目してみると、その特徴の一つは、「光っている、色が違う、カラフル、色がいっぱい」等に見られる「色彩」への着目である。もう一つは、「いろんな花」「自然がいっぱい」「お花がいっぱい」「自然が浮かんでくる」「虫がたくさん」「黒い木に太陽」「太陽の光が明るい」等、視覚的に描かれている「モチーフやその描かれ方」に特徴が見られる。特に、「自然の表現の豊かさ」につながる多様な生きものや植物の表現、太陽の存在とその表現に特徴を見つけている。この豊かな色彩や豊かな自然の表現に見られる造形的な要素が、結果として「楽しそう」「にぎやか」「あたたかい」といった主観的な感じ方の根拠として語られている。さらに、「キリンがお日様をあびている」「花が踊っている」「木が歩いている」等、子どもたちは、絵画の中に「自分の物語」を生成しながら、自分なりの感じ方を深めている。

#### 4. 実践の総括

一連の本研究の目的は、造形と言語を用いて「生命（いのち）」を主題にその意味やイメージの解釈を明らかにしていこうとするものである。その実践事例となるアフリカでの本実践は、表現と生活や環境や文化との関係に特徴が見られた。一つは色彩である。その内容は、日本の子どもたちの鑑賞活動の中でも、光や多様な色の感じ方において言語化されている。もう一つはモチーフとその描かれ方である。共通するところは、自然物や風景、人間の生活環境にあるものが視覚対象として用いられているが、アフリカの絵画では、太陽の表現や自然の色彩表現に日本の子どもたちには見られない特徴がある。この豊かな色彩や豊かな自然の表現に見られる造形的な要素が、楽しそう、にぎやか、あたたかいといった印象の根拠として語られている。

本事例における「生命（いのち）のイメージ」の詳細な検証は、あらためて報告するが、子どもたちの鑑賞活動の中で述べられた内容は、その結果を予測するものとなっている。

## 付 記

本実践は、科研費・基盤研究(C)「自然観を構築させる芸術の6層の検証—言語/造形によるメディエーション—」(19K02740)の助成において行った。

尚、本実践において協力いただいた Lusanga Primary School の教員及び児童の皆様、Radiant Universal Study Centre Primary School の教員及び児童の皆様、島岡由美子様、清須市立清洲小学校2年生担当教員及び児童の皆様に、深く感謝申し上げます。

---

### ■註

- 1) 磯部錦司, イミック・アレクサンダー「自然観を構築させる芸術の6層の検証—言語/造形によるメディエーション—」(科研・基盤C, 2019~2021)
- 2) 磯部錦司「芸術の6層による教育—自然観を軸とした知の構造—」ななみ書房, 2020, pp. 64-189.
- 3) 磯部錦司「現代日本の生命論を軸とした美術教育の展開—自然観を構築させる6段階と文化的領域—」(科研・基盤C, 2013~2015)
- 4) 磯部錦司「生命主義的自然観を基軸とした造形芸術による教育—表現内容の位置づけ—」『美術教育学研究』第48号, 大学美術教育学会, 2016, pp. 57-64.
- 5) 磯部錦司, 増井透「美術教育による自然観構築の6段階—表現内容の質的・量的な相互分析からの検証—」(科研・基盤C, 2016~2018)